

教育実践コラボレーション・センター 円卓会議「5年間の成果と今後の発展に向けて」

1. コラボレーション・センター円卓会議の概要

2011年12月10日（土）15：00～17：30、京都大学大学院教育学研究科の会議室において、教育実践コラボレーション・センター主催円卓会議「5年間の成果と今後の発展に向けて」が開催された。この会議は、コラボレーション・センターのこれまで5年間にわたる活動について報告と振り返りを行い、総括することを目的として行われた。当日は本学研究科の大山泰宏准教授の司会のもと、アクションプログラムの各ユニットを担当する本学研究科の教員、活動に参加した院生（元院生を含む）、教育現場や地域のフィールド関係者に、各ユニットの活動についてご報告を行っていた。

2. 会議の内容

はじめに、本学研究科長の辻本雅史教授からあいさつがあった。辻本教授は、センター設立の目的や意義を話された。そして、色々なフィールドと協力しながら、現実の教育的課題を考え、実践し、さらに学問的展開を進めていくようないい意味での循環を今後も大事にすべきであると語られた。

続いて、教員、院生、フィールド関係者の順に、これまでの各ユニットの活動に関する報告と振り返りが行われた。

1) コラボレーション・センター委員からの活動概要の説明と活動報告

【学校教育改善ユニット】田中耕治教授から、高倉小学校や田井小学校というフィールドを中心にしながら、どのような方向や理論が現代の学校のあり方を変えていくのか、学校を内部から改善していくことになるのかということを考えてきたことが述べられた。

【新しい教育関係ユニット】桑原知子教授が、有能性と生命性の両立という課題に触れられた。そして、「個性」と「関係性」を重視し、現場に出て行って実践すること、関係の中に身を置くことが大切であると述べられた。

【教育空間創造ユニット】前平泰志教授が、生涯教育のフィールドとして野殿・童仙房で研究、実践を行っていることや、「ローカルな知」の実践として学校に限らず様々な地域、フィールドで「教育空間を創造する」ことの意義を述べられた。

【E. FORUM】西岡加名恵准教授が、全国スクールリーダー育成研修に触れ、研修として情報を発信するだけでなく、集まってくださった先生との対話を通して新たな知を創造する場にしたいと語られた。

2) 院生による活動報告

【学校教育改善ユニット】大下卓司さん、羽山裕子さんが、高倉小学校との共同授業研究について報告を行った。教材研究や指導案作成への関わりを通して、教師、生徒、院生が育つことを目的として活動を行ってきたことが述べられた。

【新しい教育関係ユニット】永山智之さん、西嶋雅樹さんが、学校訪問とアラン・プロジェクトの活動を中

心に報告した。学校への適応に困難を抱える生徒を受け入れている学校を複数校訪問することを通し、学校における「集団の持つ力」が重要であることが見出されたことが述べられた。

【教育空間創造ユニット】辻喜代司さん、生駒佳也さんが、野殿・童仙房における生涯教育実践・研究について報告を行った。そして、「星を観る」「緑を匂う」「匂を味わう」といった感覚、身体性を活用する学習活動を始め様々な活動を行ってきたことや、童仙房の歴史が述べられた。

【E. FORUM】園部高校の田中容子先生が、全国スクールリーダー育成研修について話された。研修会について、すぐに実践に活かせる内容があるのがよい、枠組みや理論を学び直すことが研究や授業開発につながるため、今後も継続してほしいといった要望が語られた。

3) フィールド関係者による活動報告およびコメント

【学校教育改善ユニット】高倉小学校の林正幸校長先生、門田真澄先生、日下部範子先生と、田井小学校の赤井悟先生から、各学校での活動の様子が報告された。その中で赤井先生は、現場における教員の実践は決して研究者の唱える理論に劣るものではないと、そこに根差すことの重要性を強調された。

【新しい教育関係ユニット】洛風中学校の須崎貫校長先生、赤穂美栄子先生が報告を行った。須崎先生からは、京都大学の教員、院生のコメントから、生徒の別の側面に気づかされ理解が深まったという体験や、子どもとキャッチボールをしながら進めていくという現場での実践が語られた。

【教育空間創造ユニット】野殿童仙房生涯学習推進委員会の内藤浩哉氏が、過疎化が進む地域の現状について話され、一般論でなく、個別、具体、関係といったものの中にこそ、これから先役に立つ真理、原理があると思うと述べられた。

最後に、コラボレーション・センター長の田中耕治教授から閉会のあいさつがあった。田中教授はそれまでの発言を受け、大学とフィールドとの関係のあり方について共通した言葉が出てきたと述べ、大学教員が指導するのではなく現場と院生が共に育つことや、大学が情報を発信するだけでなく現場との双方向性を持つことの重要性を挙げられた。また、知のあり方や学力というものを身体を通じて問い直すことの必要性にも触れられた。その上で今後の課題に言及し、コラボレーションはまだ十分できているとは言えない、これからどのようにお互いが踏み込んでいくかということが問われていると述べられた。

3. まとめ

当日は、大学関係者とフィールド関係者が一堂に会し、なごやかな雰囲気の中でこれまでの実践、研究成果の振り返りが行なわれた。様々な実体験やエピソードが報告される中で、実践を追及すること、実践と研究のつながり、それらを今後も継続していくことの意義が改めて全体で共有された。

（文責：宮嶋 由布）